

## 娛園

わたしにはみな懐かしい三つの場所がある、——恋愛のためである。第一は『夏の夜の夢』で述べた杭州、その二は故郷城外の娛園である。

娛園は“舉社”の詩人秦秋漁の別荘である。しかし住宅の後ろに続いているので、ふだんはただ花園と言われている。この園は王眉叔の『娛園記』によれば、“水石荘に在りて、碧湖を枕にし、平林を帯び、広さは約一頃ばかり。曲構雲のごと<sup>めぐ</sup>瞭り、疏筑花の幕をなす。竹は高く牆を出で、樹は古く戸に当たる。離離とし蔚蔚たり、号して勝区と為す”と言う。園は咸豊丁巳〔一八五七年〕に築かれ、わたしが初めてそこへ行ったのは光緒甲午〔一八九四年〕、すでに四十年の後で、いたるところ荒草が生えて、当時の“秋夜連吟”の風趣は想像もできなかった。園の左よりには“潭水山房”と言うのがあり、記中に“方池湛然として、帘戸静鏡、花水は谷を孕み、箒石藍を<sup>う</sup>餌む”と言うのがこれである。『娛園詩存』卷三に諸人の題詞があり、樊樊山の「望江南」に、

氷谷は浄らかに、山裏に釣人の居。花は書床を覆いて瘦鶴を<sup>ちか</sup>づく、  
波は琴幌を揺らして文魚を散ず。水竹夜窓に虚し。

と云う。陶子<sup>ひら</sup>の一首に、

澄潭<sup>きよ</sup>瑩く、明瑟幽房<sup>ひら</sup>を<sup>ひら</sup>徹く。茶火の瓶は山蟪の洞に<sup>し</sup>笙き、柳糸の泉は水鳧の床を筑く。  
古幀秋光を写す。

これらの言葉の分かりにくさは役所がいつも出す駢体の電文に劣らないけれども、これによってなんとか彼らの幽雅を想像することができる。わたしたちが見たのはただの廢墟でしかなかったが、それでも非常に面白かった。児童の感覚はもともと大人よりずっと新鮮で、しかも故郷にはこうした遊樂の地が少なかったのも、一つの理由である。

娛園の主人はわたしの母方の叔父の義父で、叔父は晩年秦氏の西廂に住んでいたもので、わたしたちはよく娛園に遊ぶ機会を持った。秦氏の西隣は沈という姓で、多分風水の関係だろうが、表門が偏向していたので、近所ではみな“歪擺台門<sup>ゆがみやしき</sup>”と言っていた。明の沈青霞の嫡裔だと云うことだったが、すでにたいそう没落していた。わたしたちはかつてその主人を訪問したことがある。二十歳前後の青年で、片足が跛<sup>ひら</sup>っこで、座敷に七、八人の学童を集めて、彼らに『千家詩』を教えていた。娛園の主人の息子はそのころ秦氏の家長であったが、阿片を吸うので終日寝ていた。わたしたちは夕方に彼を訪ねて、家伝の梅花を描いてもらった。残念なことに彼はとつくに亡くなってしまった。

どの年だったか忘れてしまったが、どのみち庚子〔一九〇〇年〕以前の事だろう。そのとき叔父の独りっ子が結婚するので、（彼らの魂よ、安かれ。というのは夫婦はまもなく二人とも世を去ったのである）いとこたちがみんな一緒に集まったのだ。男十四人、女七人であった。そのなかに一人わたしと同年同月生まれの人<sup>ひら</sup>がいて、わたしは彼女を姉さんと呼び、彼女もわたしを兄さんと呼んだ。わたしはもともと“醜い家鴨の子”で、誰一人注目しなかったから、密かに彼女に対する恋心を抱いていた。当然片思いでしがなく、しかもわたしは彼女が小さい頃から人の許

婚になっていたのを知っていて、身分不相応の想いが容れられるはずもなかった。だが要するに拘りのある魅力を感じていて、今思い返すと、すこぶる中世の詩人 (Troubadour) の余韻があったようだ。当時わたしたちは留鶴舎に泊まっていた、彼女たちは二階にいた。昼間彼女らが部屋にいない時、わたしたち何人か比較的小さいものが“隙に乗じて内を犯し”て二階に上り食べ物を掠奪した。あるときみんなで二階で騒ぎ、わたしは何食わぬ顔をして彼女の薄紫の絹のシャツを着て踊った。彼女の兄弟も一人一緒に騒いで、何のボロも出さなかったのは、わたしがたいそう満足した一件であった。後になって木下杢太郎の『食後の歌』を読んで、「絳絹裏」を見て、思わずまたも感慨を引き起こした。

床の間の筆をとりにと、  
土用ぼしの下をくぐつたら、  
小袖の裾に触れた。  
なんとも云へぬ乱れごころに  
はつと思うて首は引いたが、  
南無、神も咎めたまはじ、  
今は亡き人のかたみなれば。

南京にいた時代に日記には多くの感傷的な事を書き付けたが、（あとでまた削り取ったから、今ではその内容を思い出せない）しかし終始結婚の関係には思い及ばなかった。外を十二年漂流した後、故郷に帰ったが、わたしたちには子どもがおり、彼女もとっくに嫁いでいた。しかも痼疾を抱いて、すでに死と向かい合っていた。以後何度か会いはしたが、わたしはまたも家をはなれて、彼女はまもなく安らかな眠りに就いた。いまでも彼女の若い頃の写真がたった一枚母のところにある。彼女が後で自分から話したのだが母の義女であったから、正式の儀式はなかったけれども。

叔父一家が亡くなってから、二十年二度と娯園に行く機会はなかった。想うに以前よりもっと荒れ果てているだろう。しかしその影像是かすかにわたしの脳裏にとどまり、我が心中の焰 (Fiammetta) の余光に照らされている。

※初出：1923年3月28日『晨报副刊』